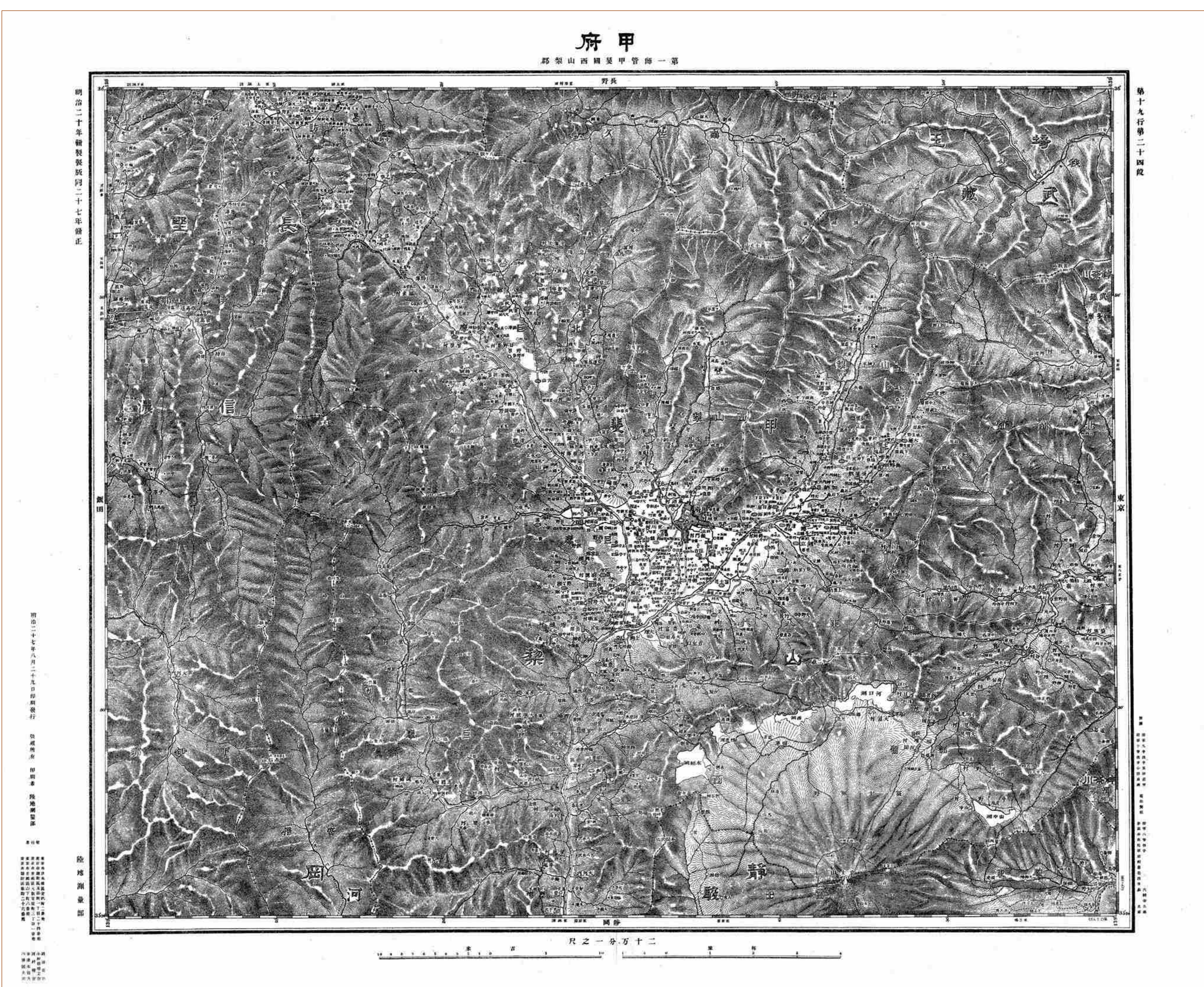
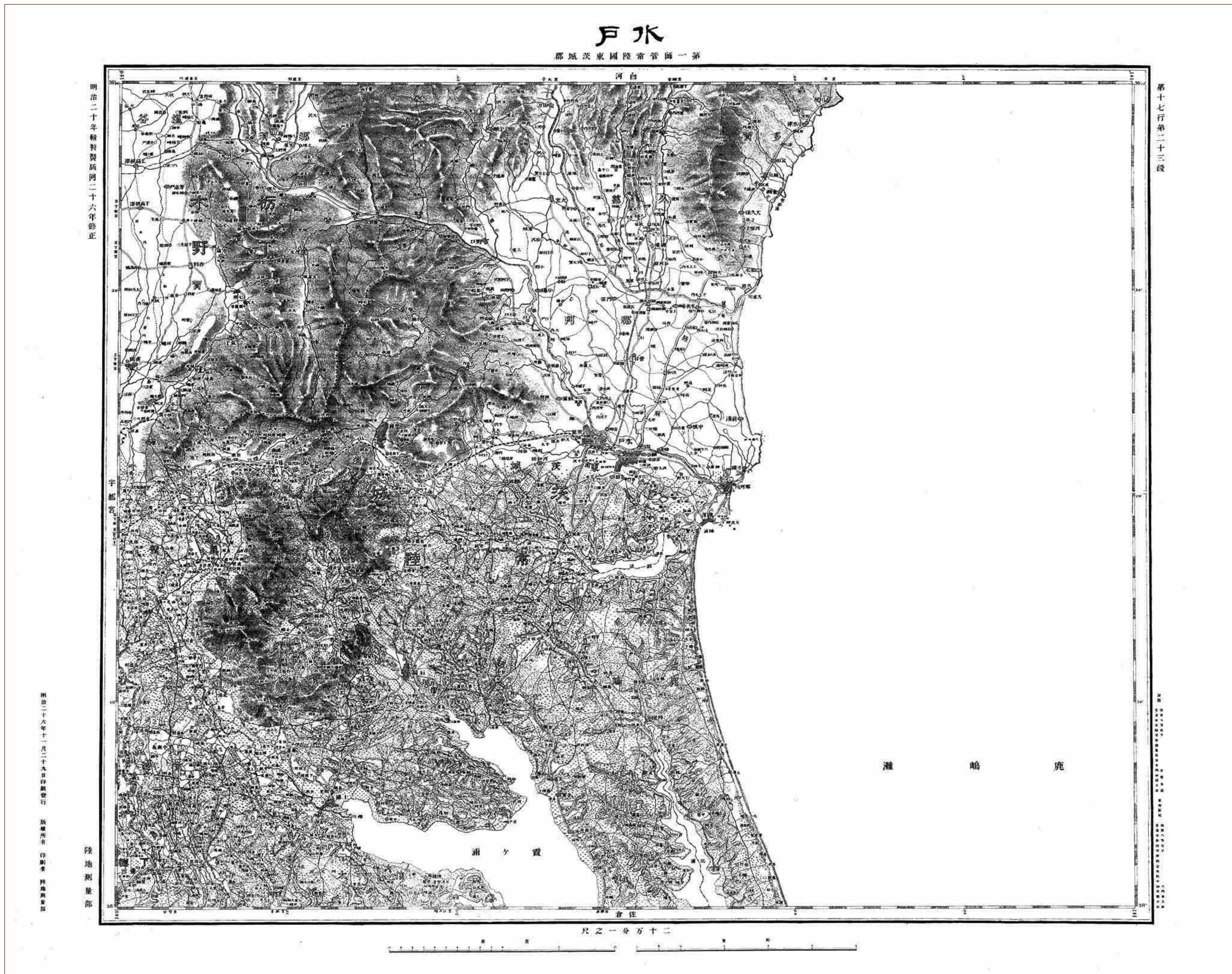


# しゅうせい 輯製20万分1図

明治17年陸軍参謀本部は、伊能図、内務省の地形図・河川図及び各府県庁作成の地図その他を資料として、経度差1度、緯度差40分の区画で、多面体図法による20万分1図の編集に着手しました。明治26年までに国土の全域（一部の離島を除く）の地図を完成しました。これが、「輯製20万分1図」（当初は「輯成20万分1図」と呼ばれていました）です。

当時この図は、統一した図式により日本全域を描いた最大縮尺の地図でした。

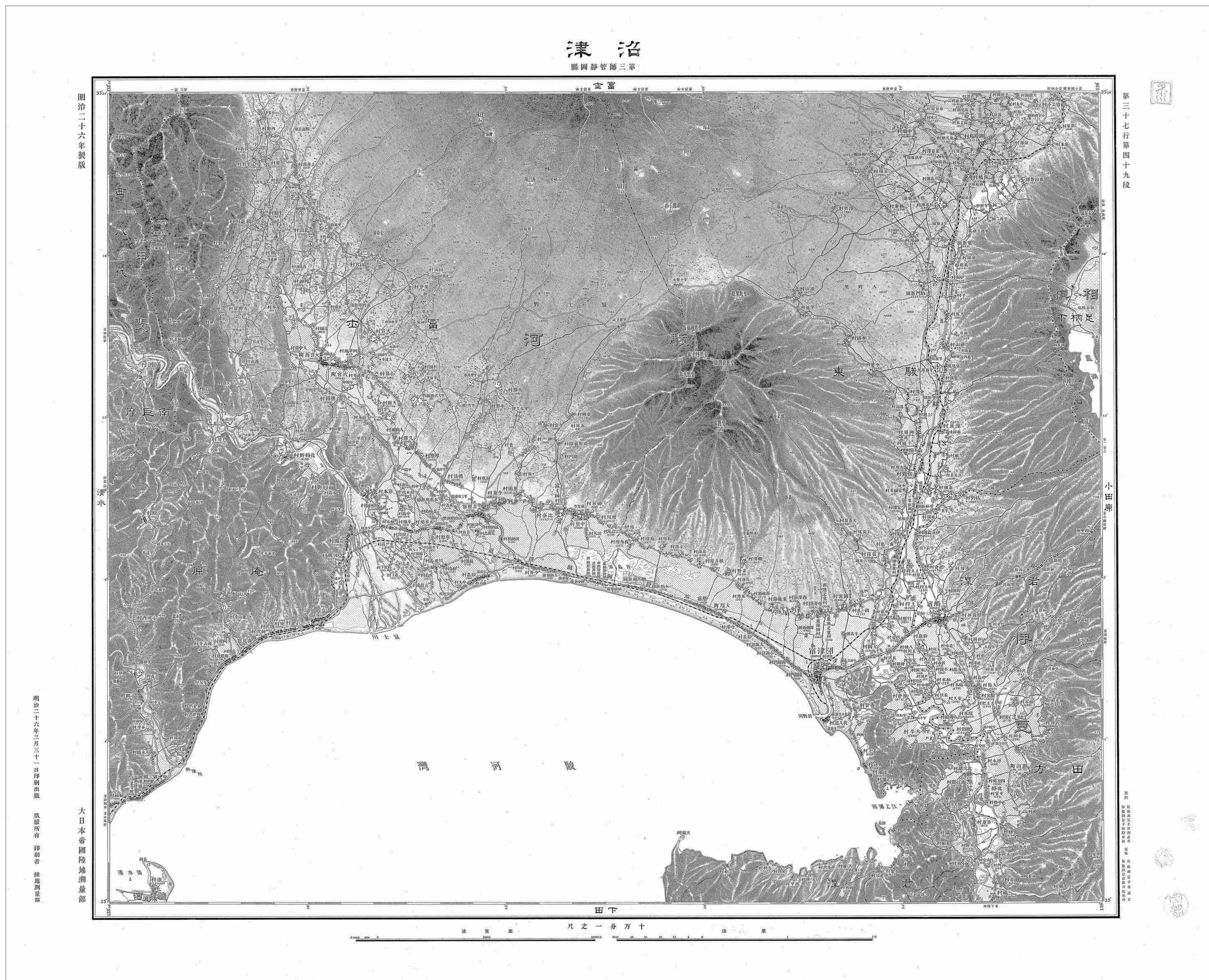




# 10万分1帝国図

10万分1 帝国図は、全国測量大綱の決定（明治12 年）を受けて、2 万分1 図から編纂（へんさん）する方針のもと同21年から編纂が開始されました。図の表現・体裁・規格等その手法は、当時のドイツ10 万分1 「帝国図」が模範とされました。基図には2 万分1実測図が使用され、その25 面で1 面が包括されるように設計されました。

東海地方の12 面の作成が計画されましたが、「神子元島、小田原、大島、天竜河口、御前崎、沼津、伊良湖崎、下田」の8 面の完成で終り、「富士山、静岡、浜松、豊橋」の4 面は未完のまま中止されました。



当時の地図製図方式は、銅版を使用して彫刻により行われ、その精巧繊美な描画は、美術品としても鑑賞できるほどの出来栄えと評価されました。その背景には、明治維新のときに失業した幕府お抱えの「絵師」が、各官庁に就職して「絵図引き」の仕事を行い、地図の描き方に影響を与えた事情があったと言われています。「地図を美術的に描く」という精神は、以後の地図製図に引き継がれました。



# 2万分1地形図から旧5万分1地形図へ

## 2万分1地形図

明治政府の各機関で行われていた測地に関する国家事業は、全て陸軍に一元化され、明治17年（1884）9月参謀本部条例が改正されました。しかし、まだこの段階では三角測量の成果を地形図に利用するには至っていなかったため、地形測量は従前の図解図根点をもって三角点に代える方式によっていました。この方法によって作製された近畿地方の図を「准正式地形図」と呼んでいます。一方、明治13年から19年にかけて関東地方において実施してきた測図を「迅速測図」とよんでいます。

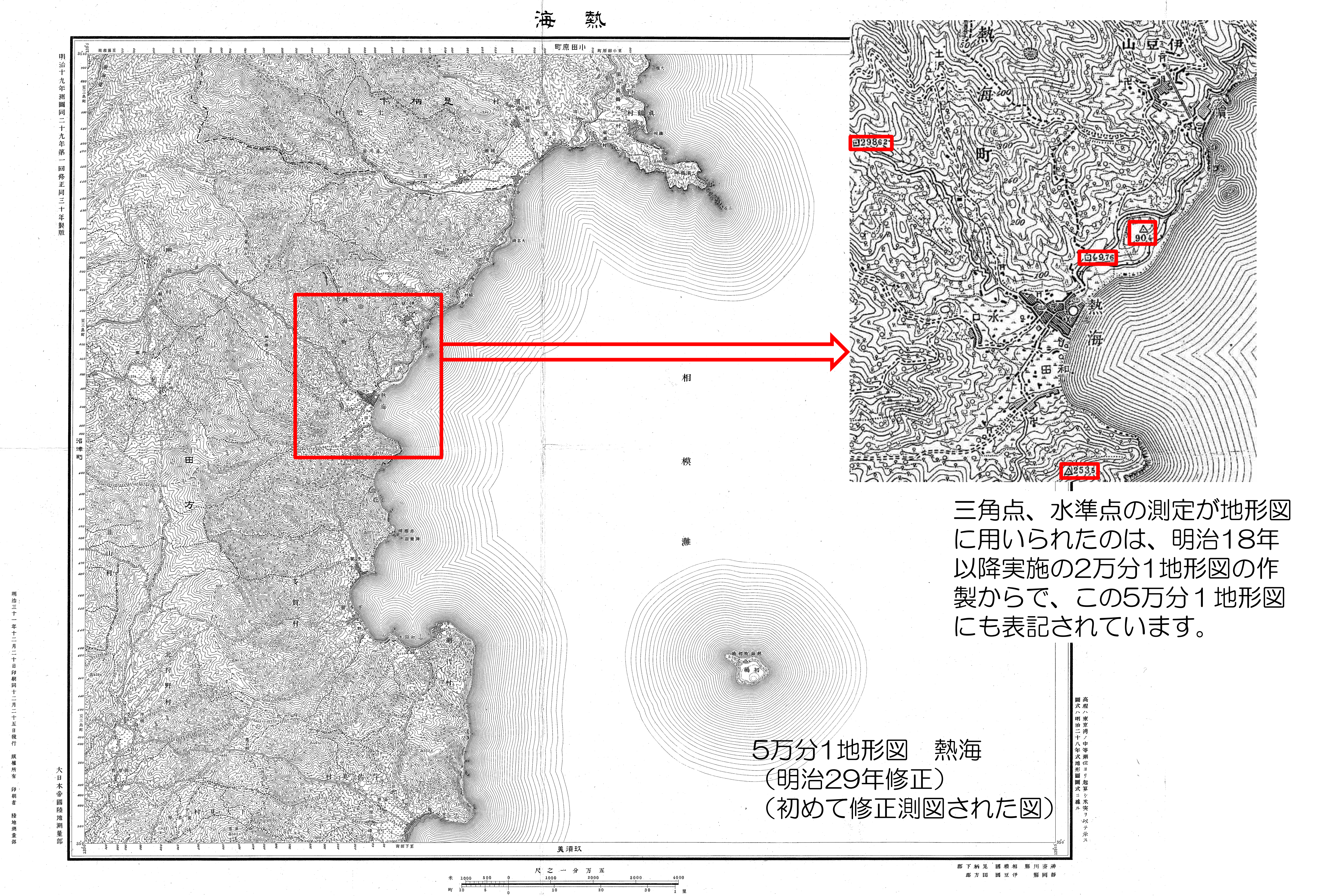
## 旧5万分1地形図へ

わが国の基本図は、明治23年（1890）に縮尺5万分1をもって全国を整備する方針に改め、明治25年から作業着手されました。

この計画による5万分1正式測図は、すでに2万分1地形図の測図を完了した地域はこれを5万分1に縮図編集し、それ以外の地域は三角測量を行ってからその三角点を基にして、平板測量により実測する方法となりました。1図葉の範囲は、経度差15′、緯度差10′で多面体図法により、図式は明治18年図式を用いました。

しかし、5万分1基本図の整備が実質的に発足したのは、日清戦争が終結した明治28年（1895）からでした。この年に全国測量を30年間で完了する長期計画が定められ、静岡県・山梨県・神奈川県・京都府および兵庫県の一部から、明治28年に制定した図式を用いて着手し、明治29年から毎年40～50面が整備されるようになり、従来正式測図と称していた地形図は明治31年（1898）12月に基本測図と改称し、大正13年（1924）には全国整備（内地）は完了しました。

この後、5万分1地形図は同一縮尺・精度・規格の地図として、変貌する国土の状況を忠実かつ克明に記録し、わが国の過去約120年間の土地の変化を読み取れる地図となっています。





# 5千分1 東京図測量原図

5千分1 東京図測量原図は、皇居を中心とする東西南北約7.5km四方の地域について、迅速測図（じんそくそくず）の特殊版として作成された5 千分1 東京図の原図です。この測量は明治9 年（1876）に着手されましたが「西南戦争」のため中断し、明治16年（1883）に再開されて翌17年に完成しています。

「明治13 年式図式」による極めて色彩豊かな地形図で、この彩色には当時の職業画家としても著名な人達が加わったので美術的にも価値の高い図となっています。また、家屋や庭園などの相当細部にわたる描写には明治初期の景観がよく表現されています。

索引図



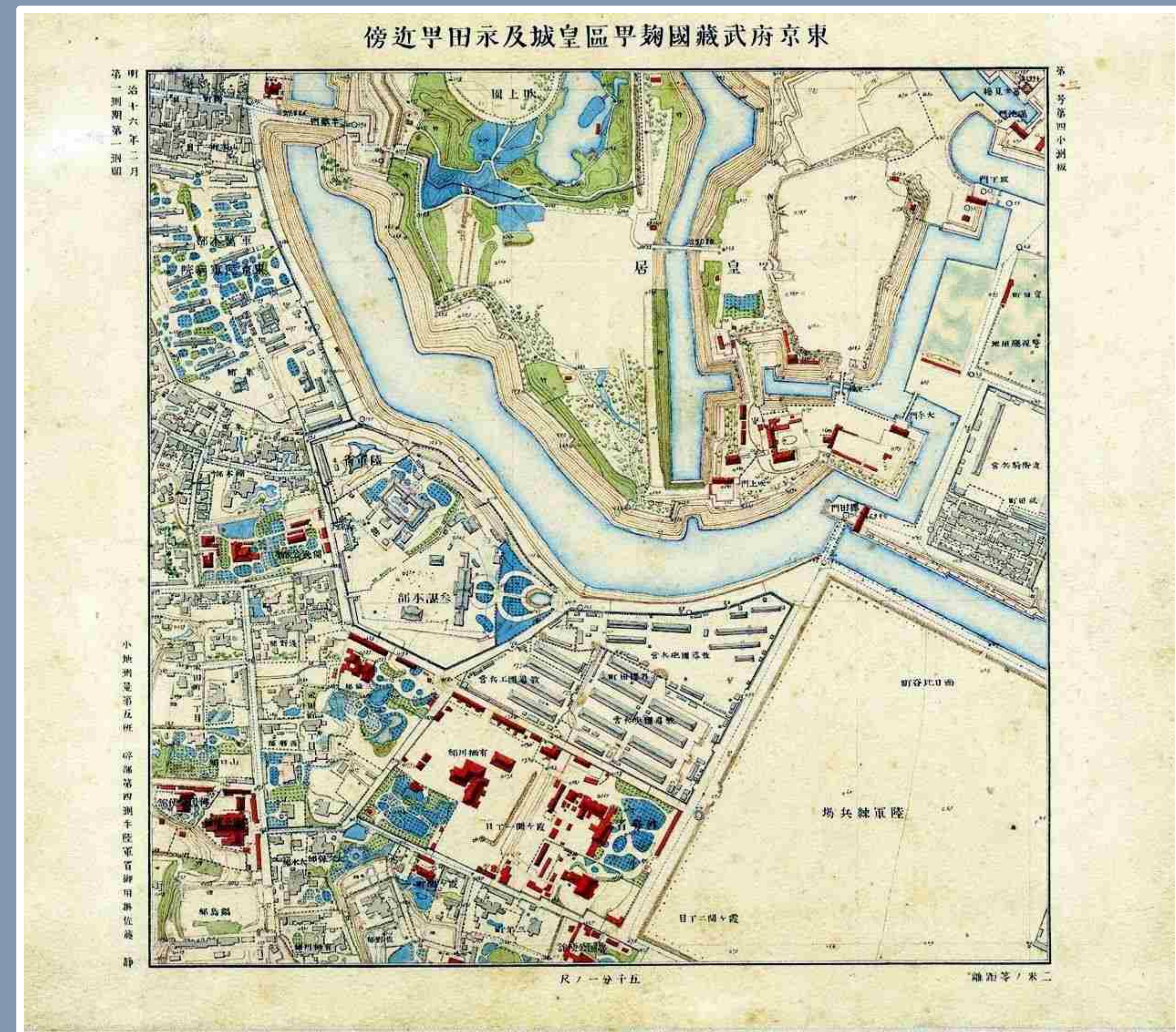
19



16



20



17

